

あを 12

2020



ひなたぼっこ

須賀忠男のBird Note

シジュウカラガン
千葉の親水公園で
初めて見た!!
一度日本で
絶滅したとの事
人為回復
して、うれしい
珍しい鳥だ



十二月集

佐藤喜孝

雑詠

けむり茸八十歳になるといふ

それぞれに佛をかかへ月夜かな

Gパンに穴ありてこそ秋の月

さきぶれのありしこのなぬルリシジミ

公園の廁の脇の枇杷の花

はつてふのやうにふるへて春のなぬ

薬局の柱の艶に孫太郎蟲

鐵柱に草の生えたる植物園



西ノ湖

秋川 泉

野仏のうしろにつづく曼殊沙華
傳茶房郁子のやさしく揺れにけり
朝散歩猫の忌にたつ秋の虹
蟬とらへ猫が「だうだ！」と見せに来る
紫蘇の根が宿になりたる根切虫
新米を炊く香の朝の猫の顔
秋日暮れ落葉松の黄の浮き上り
水枯れし西の湖の秋小さくて

年の瀬

大日向幸江

割箸の六膳の密ちゃんこ鍋
重々しい小池都知事の黒マスク
ハローイン渋谷で待つや検温器
冬銀河はやぶさ二号一直線
雪国へGOTOトラベル颯爽と
太古から海の残り香山眠る
鯛焼や昔話を例に取る
百歳はまだ序の口と山眠る



上高地

七郎衛門吉保

朝一番草に寒露のガラス玉
秋爽やミラーレイクに穂高山
岳沢に影一つなく秋気澄む
焼岳の山の色あり大正池
落葉松を赤啄木鳥の打つ秋の色
プロヴァンス犬が先登のトリュフ狩り
プロの技薄いトリュフも香のつよし
冬近し懷中時計のコツコツと



鶴のオブジェ

篠田 純子

テイラーのとなりバーバー秋の暮
園長の笑顔に笑ふ運動会
梨スムージー甘しバーボン少し足す
野外ステージ地下アイドルへ秋日さす
羽ばたくは鶴のオブジェと冬の鷺



記憶

篠田 大佳

軟骨のつくねにビールス貫ふ暮
町医者の注射ふるへて十二月
秒針の張詰めてをり初句会
酔客や胡蝶の夢の初句会
寒月や犬屋のこゑを右に折れ
寒月や披講を急かす咳払
少年は寒夜の闇にうなづけり
タクシーはひかりにきえぬ駅は冴ゆ

青みかん

須賀 敏子

窓を開け句会再開青みかん
紺碧の空に十月桜かな
公園に小さき笛の音小鳥来る
間引菜のひとかたまりや直売所
小鳥来るりんごの味のマドレーヌ
ふっくらの釜揚げ白子酢橘添へ
食前と食後に薬秋麗
仕舞湯に首まで浸かる虫時雨



台風来

田中 藤穂

台風来三宅島いま豪雨とか
秋麗コロナの町は人少な
衰へを夏の疲れといたはられ
帽子とりコスモス越しに道をきく
秋休みだとの曾孫の小学校



紅葉

長崎 桂子

ゆるり行くちらほら淡い秋の色
漕げば風桜並木の紅葉二分
急坂に石はころがり紅葉山
足取られ此所より愛でる山紅葉
天高し珍し白虹のニュース
海ちかし浜風撫でる稲の秋
碧空に古りし社や白木槿
底紅や氏神様の石畳



中秋

森 なほ子

枝をゆく髪切虫に月今宵
煮麴に刻みて秋の茗荷かな
枝豆や郷土の力士勝ち越せる
昨夜の雨木屋の花地に香り
雑木紅葉見晴台へ細き径
氣象異変託つ農夫や唐辛子
唐黍の香に誘はれて直売所
山積み目鼻まだ無き大南瓜

雑詠

赤座典子

濃淡の揺るるコスモス散歩道
わさわさとキバナコスモス路地狭ばむ
流れ星確かめ戻る山の宿
秋の霜岸辺の石に点点と
艶やかなりガレをい思はすポルチーニ
嗣治の白を閉ぢ込む秋灯
旗日と言ふ人と出掛ける文化の日



そよろりと月よりの風窓の顔 佐藤 喜孝

酒蒸しの白き目玉や秋の鱈 赤座 典子

新栗やひと山越えて買ひにゆく 秋川 泉

蝸の記憶の底の深い穴 大日向幸江

金色の歌留多敷き詰む稲田かな 七郎衛門吉保

雨あがり金木屋の香の重し 篠田 純子



深呼吸して電車待つ秋の朝 篠田 大佳

雨催ひ茎の撓りて曼殊沙華 須賀 敏子

頭北面西深夜の梅雨を聴いてをり 田中 藤穂

秋祭奉納提灯人疎ら 長崎 桂子

カンナ燃え好きなことだけする日かな 森 なほ子



一本ポプラ星座表より星あまた

佐藤喜孝

我が家の海外旅目的地に、可能ならば星空観光を加えることが多い。手始めは、ネパールの標高四千mの近くにあったエベレストビューホテル。しかし期待外れに終わった。今はウルルと表現される豪州のエアーズロック山の麓、溢れんばかりの星々を、手に出来そうな感覚だった。天文台のメッカ、ハワイ島のマウナケア山の天の川も忘れられない。何れも星座表より星あまた。(吉保)

手招きて此処にあるよと吾亦紅

須賀敏子

「マッチを擦れば風が吹いて線香がやけにつきにくい」から始まる杉本真人の曲。私もお気に入りの曲、十八番に近い持ち歌の一つ。歌詞は「ゆらゆら揺れる吾亦紅」と続く。作者の「手招きて此処にあるよと」も軸を同じくして、吾亦紅の詩情を揺すっている。花名は源氏物語にも登場とあるので、ここでも日本人の表意文字への力量の高さに驚いている。われもこうありたい。(吉保)

蟬の声夜はいっしか虫の音に

田中藤穂

この句から「声」と「音」について考えてみた。愛用本には蟬の句が、百二十句掲載されていて、

うち「蟬の声」と詠んだのは六句。「蟬の音」は一句もなかった。他方で虫は六十七句のうち、声は九句と音は四句。広辞苑には音を「心に訴えてくるような音声」とあるので、蟬の音は論外なのだろう。作者は、中七で時間の経過を詠み込み、声から音への変化を詠み出したとみた。(吉保)

キリマンジャロコーヒー熱く今朝の秋

森なほ子

この稿を記す数時間前に、あを十一月号を手にし、巻末の短文「朝食」に目を通した。和食派あり洋食派あり様々だ。我が家では何十年もパン派。それを毎朝準備するのは夫の役割、分担して四半世紀。パン派にコーヒー欠かせない。ネット経由でコーヒー専門店より豆を取り寄せる。本日の在庫は「モンテ・シオン」「パプアニューギニア」「コスタリカ・ラ・パストーラ」の三種。(吉保)

ハチ公像撫ずる人ありハロウイン

篠田 大佳

世の中には、世代間差異(ジェネレーション・ギャップ)を、避けられない事象が在ると考える。私にとつてのハロウインはその一つである。我が国とは縁遠いと思われる古代ケルト人の、悪魔を払う祭りがハロウインとあり、祭りの存在を理解できない。欧米諸国の方々が、秋田県の「なまはげ」の存在を理解したり、エンジョイ出来たりするだろうか。同質の疑問のように思う。(吉保)

肌脱ぎのふはふはドレスハイヒール

秋川 泉

第3回あを通信句会に詠まれた句。句の第一印象は、昭和二十年代に高峰秀子が歌った「銀座力ンカン娘」。何故だか喜孝さんと私が選句している。上五を受けた、ふはふはドレスとはどんな服、とイメージを膨らませてみたりする。提灯袖で、胸元ゆつたりで、スカートはAライン風でなどと履いているのはハイヒールのようなだから、少なくともアップパーではなさそうとか。(吉保)

夏 早 曉 梅 干 し ひ と つ 粥 半 膳

篠田純子

この句を選んでは見たが、はてどのように受け止めればよいのかと、躊躇している最中に、あを十一月号が手元に来た。毎朝六時半に粥半膳の一回目の朝食をとると記してある。大佳さんが十月号で詠まれた「片麻痺の父に涙といふ言語」の方のサポートから生まれた、パターンなのだろうか。早曉と梅干ひとつで、まずは気持ちを爽やかにしているのではと、拝察いたしました。(吉保)

突 然 に 空 砲 ひ び く 豊 の 秋

大日向幸江

今年も集中豪雨をはじめ、様々な天候不順災害に遭遇した。一昔前までは、農作物不良と対をなしていた。しかし品質改良技術の進歩により、農作物への被害は大幅に改善された。他方で山間に自生する、団栗・椎木・胡桃・栗などは品質改良とは縁がなく、今年は正に不況年とのこと。そこで町中に熊の出現などとなる。豊の秋の裏側で、熊・猿・猪など脅す空砲が聞こえてくる。(吉保)

空 蟬 や 早 回 り 独 楽 に 似 果 て る

長崎桂子

空蟬、これは探しに行っても、なかなか見つけれられるものではない。庭掃除や植木手入れなどして、ふと手を休め見上げると、目の前に出現するという、偶然が多い。この年になっても、見つけると感激したりする。横線の入った背を丸めた姿は、独楽がぐるぐる回っているようにも見える。独楽は、くるつとひっくり返って止まる。蟬も、ひっくり返って果てるように見える。(吉保)

籠 り ある 長 崎 の 忌 の 深 呼 吸

赤座典子

理由はともかく家にゐることが多くなった。ことしも広島・長崎と原爆投下された日が来た。思はず深呼吸をする。体操の終りの深呼吸とは違ふ。時を経て原爆投下の新しい情報もたらされる。真実を見極めなければと思ひつつ、オセロのやうに価値観の変る世の中をただただ見てゐる。深呼吸をして。(喜孝)

渡 され る バ ト ン の 重 し 長 崎 忌

七郎衛門吉保

平和への願ひのバトンである。「渡される」に作者の誠実な人柄が現れる。渡された重たいバトンを次の人に渡すといふ仕事が残ってゐる。昔日、『朝日新聞』に憲法九条を守る意見広告のことを赤座夫妻に教へられ参加した。これもバトンの一つか。(喜孝)



佐藤喜孝

秋川 泉

新酒酌む無敗牝馬の秋華賞
さはやかや三冠牝馬凜と立つ
観客の無き三冠馬秋闌ける



○競馬は全く知らない。秋華賞は京都競馬場での重賞レースとか。先日チャンネルを回してゐたら競馬の途中に行き会った。レースの終りまで見てゐた。独走態勢の馬が力尽き他の馬に次々抜かれてゐた。レース終了後勝ち馬の騎手が外国人で驚いた。それより驚いたのは馬の姿。私の中の競走馬と全く違ひ筋肉隆々に見えた。テレビの映像進化の性なのか、または馬の調教法が違ふのかわか

らないが、筋肉で鎧ってゐた。句の雰囲気から美味しいお酒が飲めたやうだ。

○この句も勉強させてもらった。「牝馬三冠(ひんばさんかん)とは、三歳牝馬限定競走である桜花賞、優駿牝馬(オークス)、秋華賞(1995年まではエリザベス女王杯)を指す。過去に牝馬三冠を達成した馬は、メジロラモーン、ステイルインラブ、アパパネ、ジェンティルドナ、アーモンドアイ、デアリングタクトの6頭。2020年はデアリングタクトが史上初無敗の牝馬三冠を達成した。」と。三冠を達成出来るレースは当たり前だが秋華賞しかない。季語の「さはやか」はよい。が「凜と立つ」は新聞の見出しのやうだった。

○これも勉強「三冠馬とは、三歳馬のクラシックレースである皐月賞、東京優駿(日本ダービー)、菊花賞の三冠レースをすべて制した馬を「三冠馬」と呼ぶ。過去に三冠を達成した馬は、セントライト、シンザン、ミスターシービー、シンボリルドルフ、ナリタブライアン、デュープインパクト、オルフェーヴル、コントレイルの8頭。2020年のコントレイルは史上初父子無敗の三冠を達成した。」と。

この句はコロナで無観客の秋華賞であらう。三冠牝馬を三冠馬でよいのか不明。



大日向幸江

桃色に春待つ心箱に入れ
年の瀬や薄墨で書く御香典
銀杏落葉裏表なく天に舞ふ

○「春待つ」は冬の季語であるが、春にはもつと重い意味あひを感じる。

心臓移植が初めて国内で行われて時の映像で、心臓を運ぶ箱を提げて運搬したのが記憶に残っている。確か緑色をしてゐた。この句は心臓ではなく、心かなのだがなぜか思ひ出した。幸江さんの心が入る箱はどんな箱なのだろう。

○十一月になるとぽつぽつと喪中のおしらせの葉書が舞ひこむ。はつとする。幸江さんも今年、喪中の葉書を出された。香奠袋はなぜか薄墨で書くならはし。であるのでちよつと工夫して「年のや薄墨で書く表書き」。

○あの人は裏表がないといふ使はれ方をされる言葉が、詩語として見事に輝いてゐる。はらはらと碧空に舞ふ銀杏の落葉に心も晴れる。「銀杏落葉」を「銀杏黄葉」とすると映像がもつと鮮やかになる。

七郎衛門吉保

科学者の任命揺れる文化の日
句の友と丁丁発止文化の日
八十路逝く兄の歩みや鰯雲

○菅首相が誕生してすぐに日本学術会議の人選に關与したと騒ぎになった。このことに興味を持って俳句にした。俳句には作者の喜怒哀樂が根底にあると思ふ。この偉い人の喧嘩？は文化の日にふさしいと思はれたのか打ち合わせうう。吉保さんはこの問題を喜怒哀樂のどれに当たるのだろうか。

○こちらの文化の日は楽しさう。句会後の飲み会は本当に楽しかった。句会が終わると近くの蕎麦屋の二階に繰り込む。若い私は注文の取りまとめ、お金を集めてお店にはらふ役であった。ここで句会では聞けない俳壇の話や今終わった句についての突っ込んだ話などあつといふ間に時がたった。

○「逝」の漢字は長逝・逝去などと使はれる。この「逝く」が「歩み」と消しあつてゐる。

悼「八十路なる兄の歩みや鰯雲」

と前書を使つてはだらうか。天空に広がる雄大な鰯雲。まさに兄の人世を偲ぶにふさはしい。

篠田 大佳

秋 薔薇指が戻ったピアノリスト
パワハラという言葉に咲いた葉鶏頭
おやゆびにT o D oリストを消す暮秋

○何かの理由でピアノを弾けなくなったピアノリスト。そのピアノリストが努力の末ピアノの前に戻ってきた。そのことを「指が戻った」と表した。経緯を知る大佳さんは見事な薔薇の花を見たのだらう。「秋」に思ひを込めて詠まれた。

○時事語を使ひながら俳諧に見事に仕上げた。葉鶏頭が咲くといふ言ひ方は皆無ではないがまづ見たことがない。葉鶏頭のあの激しい立ち姿は大佳さんの静かな反逆心にみえる。パワハラといふ大きな力に対抗した見事な作品と思ふ。

○カタカナ語二句の後ついに原語が出てきた。

【「ToDo（トウドウ）」とは、一言でいうと「やるべきこと」、「やらなくてはいけないこと」という意味で、作業タスクの一つと捉えても良いです。】

【「ToDoリスト」とは、先に説明した「ToDo」をリスト化したもので、簡単に言うと、「やるべきこと」、「やらなくてはいけないこと」のリスト（一覧）です。】

私には終活に使へさうなアプリだ。以前は目を覚ますと仕事の手順を考えたが、この頃は朝は何

を食べやうかとかと、冷蔵庫の中を思ひ出しながら考へる。掲句は大切に思つてゐたことを画面から消す。スマホの画面を親指が一押しが一撫ですると大切な事柄があつといふ間に消えた。「大切なこと」と思つたのは「暮秋」の季語に起因する。仕事以外のことと思へた。

須賀 敏子

集ふこと言ひ出せぬまま薄紅葉
柚子坊を見て見ぬふりの昨日今日
送電塔先の先まで秋の空

○どのやうなお仲間か知らないが、団欒の場を持ちたいと希望するコロナ籠りの敏子さん。なかなか収まらぬコロナウィルスの勢ひにつひ呼びかけをためらはれる敏子さん。さうかうするうちに夏も過ぎ楓もうつすらともみづる頃になつてしまった。といふ句意か。後年コロナ禍が原因で「言ひ出せぬ」とわかるかは不安。

○柚子坊をかわいい柚子の実と思ひ最初書いたが、校正子に正されうた。辞書を引く手間を省いた結果です。ナミアゲハ・クロアゲハなどの幼虫、ユズやカラタチの葉を食害すると『広辞苑』にしつかりとあつた。柚子坊に気取られぬやう、成長を観察してゐる作者の姿が見えてきます。

○山から山へと谷を渡ってゆく送電線。その送電線を支えて仁王のやうに立ってゐる送電塔の列。澄んだ秋空の下では爽快な心持になる。「先の先まで」に壮大な光景が浮かぶ。

田中藤穂

お祭の金魚が育ち秋高し
鳩の声この頃聞かず秋の朝
台風来米櫃減りてぬし不覚

○夏祭で買った金魚が器の中で泳いでゐる。見てゐるとお祭の楽しい思ひ出が甦る。季語がいい。根暗の私は無為に過ごした時間を思ひ暗い季語を付けてしまふだらう。流石は人生の範とする藤穂さんは「秋高し」と。気分爽快。

○わたしの身辺に鳥がなくなった。掲句は気にしてゐた鳩がこの頃声も聴かなくなったと案じてゐる。鳩と云つても土鳩ではなく雉鳩だらう。雉鳩も鶺鴒も見かけて辺りを観察するともう一羽見つけることがよくある。ベランダでの育雛の話を聞いたこともある。

○同感である。足が弱くなつてから悪天候で困るのが買ひ物。この句のやうに不覚を取ると食料困窮者に転じてしまふ。そんな時でもお米さへあれば何とかなるといふものだが。「不覚」が武人の

やうで面白かった。句を通じて作者と会話するのもこの欄の楽しみである。

長崎桂子

白黒の昭和の回顧夜長かな
月今宵あまねく明り戴けり
名月に癒されました声多し

○テレビがカラー化に弾みをつけたのは確か上皇の結婚パレード。新宿の街頭テレビを見に入った記憶がある。「白黒の昭和」は桂子さんの念ひでもある。先日NHKで疎開地の映像や戦後の青空教室などをカラー化して放送してゐた。カラー化にどんな価値が生じたのか分らなかった。それよりモノクロ映画の雨降り画像をデジタル技術で修正した『東京物語』を見た。カラーよりはるかに美しい映像であった。

○まさしくその通り。万人になんの差もない。有りがたいことだと桂子さんは「戴けり」とした。○その時の心のありやうで月光の意味合ひも違ってくる。このことはみなを知るところである。そのをりの桂子さんは「癒されました」といふことばにつながる。口語も時により心情をリアルに伝える。「声多し」は言はずに独白にとどめることが大切である。

森なほ子

南瓜ランタン三角の眼は何笑ふ
どの顔も半分だけの秋の旅
嘘つきの為政者ママコノシリヌグヒ

○季語はハロウィンか南瓜ランタンか。ハロウィンで作るランタンはジャック・オー・ランタンといふらしい。三角に刳り抜かれた南瓜の眼が笑ってゐるやうに見えた。「何笑ふ」といふ思はせぶりなところが可否の分かれるところ。はつきりしすぎて、ぼかしすぎてもと作者はまよふところ。この句の「何笑ふ」の思はせぶりは要一考。ハロウィンの表記はハローウィン・ハロウィン・ハローイン・ハロインとある。電子辞書の英和辞書で発音を聞いた。私には「ハローウィン」と聞こえた。○「半顔」といふ言葉があつたなと『広辞苑』を。「顔の半分」と素っ気ない。『字源』にはない。『日本国語大辞典』も同じやうなもの。例文として「一男手巾を以て半顔を掩ひ帽を低くして額に及ぼす」と。いい加減な言葉だ。句に戻る。「どの顔も半分だけ」は旅人の心ここにあらずといふことなのであらうか。作者の意図を掴んでゐるか自信がない。なほ子さんからマスクですよとヒントを頂きました。

○なほ子さん大変お怒りのご様子。嘘つき為政者の尻を拭かねばならぬママコノシリヌグヒの辛さ

を思ひやった。それにしても上手く嘘をつかぬ為政者は失格。為政者の嘘は必要悪。嘘も方便である。世の中が幸せになる嘘についてほしい。ついた先からネタバレで嘘と分る為政者にはママコノシリヌグヒの出番である。

赤座典子

秋高し上棟の紙垂きらめきて
濠の面静まり返る冬隣
文庫本厚き二冊を冬用意

○棟上げの日、大工さんまたは工務店が御幣を立てる。一生に何度も家を建てる人はさうはゐない。秋空に正に「きらめきて」は建主さんの心もちである。

○ある意味なにもない俳句。作者には珍しい傾向の俳句である。典子さんの或る時の心境の反映なのであらう。「冬隣」が決まってゐる。

○手術のための十一月末に入院された。といふことを知りこの句を読むとただの冬用意ではない。不安な病気を抱へつつそのことには触れず「冬用意」とされた。俳句作者の覚悟のやうなものを見た思ひがする。



発行 昭和37年8月14日
 発行所 水音社
 限定出版 一一〇部

秋深し笑ふ埴輪に笑み返す
 スケッチの音して晩秋巨佛群
 犬に裾嗅がれ他所者冬めける
 春服が猿の仕草に顔そむく
 少年の瞼閉ぢられ鳥雲に
 竹眼鏡太く二月の基地に向く
 廃線とか黄落の中軋み停る
 鴨ゆっくり潜る生國忘却し
 貝色の掌して貝剥く冬の土間
 急がぬ旅落葉のみちに尻餅する

順序よく死して平穩年明くる
 初明り海へ築ける若い町
 人造湖角ばり囀鴨がゐる
 春雲出て来てミミズ硬直す
 裸電球過労の金魚紙に掬はれ
 蝶が息づく色褪せた登山帽に
 菖蒲苑人ら義理めく感嘆詞
 片言に乳房隠しのある水着
 美しき雑然秋めく街並は
 裸婦大画白髪の杖すべりけり

ギターの胴の限りなき暗かかへる詩人
 べったり夕焼つんのめる疲労の電車
 月に青く眠る漁村生きてる波音
 寒月を黙黙と踏む一人マラソン
 枯原に山羊は短い尻っぽ振る
 海が浴場緻密な砂になりて秋
 網を曳く漁婦に嬌笑秋暑し
 角砂糖溶くる間秋思の貌である
 炭負にハイカー会釈異質の疲れ
 小気味よく割箸割って年忘る

御屠蘇

秋川 泉

年始の挨拶を父は大切にした。賀詞挨拶の来客を客間に通し御屠蘇の盃を差し上げた。厳かな正月の風景。朱塗りの立派な屠蘇器であった。

私が嫁ぐ時、父はその屠蘇器と同じものを持たせてくれた。嫁してその屠蘇器を正月に一度用いたか否か記憶にない。父の愛情であったのだが、立派過ぎて今はどうしたものか…と、つくづく思う。正月には、焼物の小さな屠蘇器を用いている。



箱根駅伝

篠田純子

正月三日は、京橋の明治屋辺りで箱根駅伝の応援をする。各大学の応援合戦も楽しみだ。青山学院のチアガールは、美人が多いようだ。ポニーテールがステキ。日体大のチアガールは、空中でバク転の特技を見せる。安産型の足腰だ。山梨学院のバンカラの団長も、太鼓の音にも元気が出る。そして走って来た選手は、アツと言う間に目の前を通過する。

初伊勢

長崎桂子

新年の歳時記七十ページを改めて読みました。「初伊勢」に父と弟と三人で毎年五年間ほどお参りした戦前の小学校の頃を思い出しました。「白朮詣」は結婚して五年ほど経て京都でお正月を迎えようという事になり家族で出かけて八坂神社で体験しました。今でも笑いが込上げます。

一万円

篠田大佳

お年玉を貰っていた時分、テレビゲームを買いにおもちゃ屋へ行った。会計の時に一万円札をレジに出すと、それを見た小さい子どもが驚きの声を上げた。彼は一万円札で買い物をしていることに憧れていたようであった。現金払いが主流だった時代の話である。

初富士

早崎泰江

ちよつと前転んで左鎖骨を折ってしまいました。それでなくとも句が出来ず悶々としています。キーワード俳句事典を読むとあらこんな句作ったかしらとか、ああそうだったわねと独り言を言っています。〈初富士や不穩の気色寄せつけぬ〉以前詠んだ句です。この句の気概で良い年を迎えたいと思っています。

初詣

田中藤穂

私の生家は日暮里諏訪神社の参道に面していたので除夜の鐘が鳴り始めると同時に初詣の人が通り始めます。平常は静かな寺町が、あちこちの寺で百八つの鐘を撞きはじめる。その中を初詣の人の下駄の音、靴の音が徐々が増えて行きます。あの頃は家族が戦地に行っている人も居て、祈ること沢山あったと思います。私は大晦日の蒲団の中でその足音を聴いていたと思います。いつまでも戦争のない世の中が続くことを祈ります。

二人

共感の思ひ身に沁む二人かな
 楽譜ひらく青年二人春のカフェ
 啓蟄や二人暮しの一人旅
 御日出糖甘露子清白ふたりして
 ふたりして蛙の目借りどき首肯
 男らの二人一組落葉掃く
 銀杏散るベンチの二人スマホ打つ
 料峭の町の夜道の二人連
 二人して流れ作業で梅を干す
 庭師二人帰り釣瓶落しかな
 春満月見よとの電話二人より
 雛の日は苺のケーキ二人分
 用済みのかかしと遊ぶ子がふたり
 秋の海に對ひ二人とひとりかな
 初詣祢宜にまとはる吾子ふたり

淵

山莊 慶子
 篠田 純子
 赤座 典子
 佐藤 喜孝
 佐藤 喜孝
 森 なほ子
 黒澤 佳子
 長崎 桂子
 大日向幸江
 長崎 桂子
 田中 藤穂
 森 なほ子
 秋川 泉
 佐藤 喜孝
 秋川 泉
 赤座 典子
 佐藤 喜孝
 篠田 純子
 黒澤 佳子
 堀内 一郎

梅雨最中二日ばかりでジャムを煮る
 明日嫁ぐキユツと奥歯を二日灸
 二日灸嫁ぎて耐えよと祖母の指
 異次元に二日の後の虫の声
 運動会二日遅れて晴の朝
 蔵煮て安房の泊りも二日目に
 仏画
 贗物の大きな仏画春の雪
 筆
 筆ペンのどれもが乾き十二月
 一屯の筆を握りし年賀状
 筆匠の庭に白梅今朝ひらく
 筆ペンの習字鬱の字梅雨の入
 十三夜小筆が含む墨淡し
 裏筆に朱を点じたる大き蓮
 哲学の道筆塚に日向ぼこ
 箱毎に母の筆あと雛納
 底紅の深いところへ筆頭
 紅筆の走りて生まる唐辛子
 巻紙の筆のやさしき花便り
 書を曝す筆筒の底に虫のから
 平筆に赤をふくまず終戦日
 筆柿のイルミネーション枝ひろげ

鈴木多枝子
 藤野 寿子
 藤野 寿子
 赤座 典子
 須賀 敏子
 田中 藤穂
 田中 藤穂
 内藤 悦子
 篠田 大佳
 関口 ゆき
 芝 尚子
 関口 ゆき
 堀内 一郎
 森山のりこ
 芝 尚子
 篠田 純子
 鎌倉喜久恵
 芝 尚子
 鎌倉喜久恵
 佐藤 恭子
 長崎 桂子

佐藤恭子遺句抄3

人伝の訃報はいやよ銀木屋

ひしめきてうぶ毛の中の冬日差

正直と嘘のはざまの曼殊沙華

寒雀人好き羊羹もつと好き

あぶら鮠動かず秋の雲の過ぐ

手首の輪ゴムひとつもらって梅の花

昼の月断ちて雁金翅まぶし

初鏡娘の紅を盗み塗り

木枯や徳利耳にあてて振る

頭から紙の袋に鴉の子

やはらかな雲朝から温泉に入る

羅の蹠すぎゆく雨上り

野老掘指十本を使ひきる

何の木か梢に瓢箪ぶらさがり



あとがき

句集『みづおと』について

先月続き『みづおと』句集より十代の私の句を打ち込んでゐて止めたくなったが、載せると宣告してしまつてゐた。恥がかかるのも生きている証と感謝？。一郎さんは拙句のへふるへてる糞吸う管が炎天にをよく言上げてくれた。調べたら十七歳。私は一郎さんのへ満月に子を置き石鹼をとりにつくが大好きでそれを云ふと「娘なのに剣道をやるんだよ」とうれしそうにボヤいてゐたのが懐かしい。お目汚しでした。作者名は全て武井石艸先生が版木に彫り刷つていただいた。鉄筆と云ひ製本と云ひ今思へば小さな豪華本である。

新年の季語

今号のお題「新年の季語」で書いたがスペースがないのでここをお借りする。

年始まはり 佐藤喜孝

何歳ぐらいからか忘れたが、長男だからとご近所の年始回りをさせられた。母が仕立てた和服を着て年賀

と印刷された紙に包んだ手拭を持たされて一軒一軒へごあいさつ。嫌で嫌でせうがなかったが、反抗するほど根性はなかった。もちろん相手も我が家にお年賀に来る。いつの間にか廃れてしまつた行事だ。振り返りこんなことをしてゐたのかと不思議な感覚、夢の中に生きてきたのかもしれない。八田木枯さんは鳥追などが消えたことを懐かしんでゐた。新年の季語はほとんど遺物になつてゐるやうだ。

コロナに振り回された一年であつた。

(喜孝)

二〇二〇年十二月号(2刷)

発行日 十一月十九日

発行所 東京都中野区中央2-50-3

電話 090-9828-4244

ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット/須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)